■ 図書紹介 ■

上原弘江編『上原専禄著作集25・世界史認識の新課題』（評論社，1987年）

二谷貞夫

学習指導要領の改定にむけて，臨教審・教課審の答申が行われ，戦後40年の学校教育の「花形」教科社会科は,「解体」の方向をたどっている。

国際化時代という情況認識の中で，高校教育で「世界史」必修論が叫ばれている。戦後，高校社会科の一科目として成立した「世界史」は，日本人の世界認識をきたえる意味で模索してきたものであることはまちがいない。

しかし，その世界史教育の背景となる学問であるはずの世界史学への挑戦は，どこまで進んだのであろうか。大学アカデミズムは，明治以来の国史・西洋史・東洋史という三分科体制を打破して，世界史学の道を示す体制を創造してきていないのである。

社会科から「地歴科」を独立させて，日本史あるいは世界史を科目として必修化する前に是非ともやらなければならないことは，世界史学という学問づくりであろう。

こうした情況の80年代後半に，上原専禄著作集が刊行されはじめたのである。その第一回配本が，紹介する本書であることは，戦後，一貫して，世界史学の模索と世界史教育へ発言しつづけた上原史学を学ぶ絶好な機会といえよう。

世界史必修論を説く人々が，どこまで上原史学を戦後の世界史研究・世界史教育の動向の中で位置づけ，歴史学研究において世界認識の問題としてとりあげてきたのだろうか。

本巻は，「世界史認識の新課題」というタイトルが付されており，氏が生前に出版を予定していたもののタイトルである。

本巻に編集された諸論文は，1958年から1969年にかけて氏が世界史認識を深める方法を研究する中で発表されたものと未発表のものあわせて15本になる。

その構成は，次のようである。

本巻の論考について

第一部　世界史認識への国民的要請

現代認識の問題性

アジア・アフリカ研究の問題点
世界史における日本
非同盟主義の倫理と論理
第二部　世界史認識の作業方法
世界史研究の方法を求めて
アフリカ認識と社会人類学
続アフリカ認識と社会人類学
歴史研究の思想と実践
第三部　世界史像形成の諸視点
世界史像における「東洋」と「西洋」
ランケと〈ヒストリア・ムンディ〉
附〈ヒストリア・ムンディ〉について
マルクスとソ連アカデミー〈世界史〉
世界史の見方
現代における「東洋」と「西洋」
［補　遺］
世界史の起点
あとがき　　上　原　弘　江

上原氏の生活現実の歴史化的認識としての現代認識という方法は，法則化的認識や個性化的認識という方法の歴史認識にとって，欠くことのできない課題化的認識の方法を提示する世界史の方法である。その具体的な作業を本巻の諸論文を通じて読みとっていくことが，読者にとっての作業であろう。

そして，今日から未来21世紀の人類的課題としての世界史認識の方法とその世界史の創造という課題を提示するものであろう。

なぜ，13地域論の世界史が仮説として提示され，また，世界史起点論が提示されるのか，そして，世界史と人類史の区別を論じ，両者の関連が問題とされるのか，1960年代の諸論文は，1980年代から21世紀にかけての世界史認識の方法をあらためて問いかけているといわざるを得ない。

吉田悟郎氏の仕事は，上原史学の方法を継承しながら，世界史学の道を模索し探求しつづけて

いる。今，筆者は読者とともにもう一度，上原氏の世界史論を再読し，世界史学の道程をみきわめながら，さらに，日本国民にとっての世界史認識の方法と内容を豊かにする方途をもとめてみたいのである。

国際化時代の世界認識の方法は，世界とのつきあいかたを深めることであろう。しかし，日本的な同質社会を崩さないような歴史認識の方法（例えば，単一民族国家論的な認識枠組）では，世界史教育の必修化は意味をもたないのである。

国際化をとなえることは，日本自身，日本人自身が，異質多元的な自己を創りだすことでなければならない。

その世界史認識の方法として，上原氏の提示している13地域論による自己・地域・日本・地域世界・世界を貫く作業仮説をさらに発展させる必要があるのではなかろうか。

（1987年11月10日 稿）

（上越教育大学）